
東方もこけね勉強抄

DEEP三昧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方もこけね勉強抄

【Nコード】

N9413G

【作者名】

DEEP三昧

【あらすじ】

『 姫と焼き鳥って、どっちが学力良いの？ 』唐突な因幡てゐの一言が、迷いの竹林を飛び出し、幻想郷中を巻き込む大騒動へと発展する…のか？輝夜と焼き鳥 〓 妹紅の学力勝負の行方は如何に！

妹紅と慧音のプロローグ（前書き）

この話は、東方Projectの二次創作小説：ファンフィクションです。

人物名の読みや舞台設定など、読者様が把握している事を前提に書かれている傾向にあるかも知れません。
また、キャラ崩壊・作者のキャラ等設定の認識不備などが、諸々出ていましたら、

「どうかお許し下さい」

妹紅と慧音のプロローグ

「妹紅…これ…」

「…云うな」

季節は梅雨入り前。

雨続きのジメジメする日々には、まだ少し早い幻想郷の竹林。

そんな時期にあつて、連日梅雨に晒された湿気に、無言で耐えているかの様な空気を発している2人の女性が、木製の大きめな卓袱台ちやぶだいに向かい合い座っている。

「……………」

卓袱台の上に一枚の薄い紙。長方形の白い紙。

そんな紙切れが、紅い館のメイド長の如く2人の時間を止めていた。

でも、紙を見ているのは1人だけ。

行儀良く正座で座り、薄々予感していた結果を、二つも三つも床下に突き抜ける現実を前に、続く言葉も見つからず、目の前でそっぽ向いてる胡座すわりの女性…妹紅と紙切れとを、交互に見比べている。

「……………」

対して、先ほど妹紅と呼ばれた女性は、紙切れは勿論のこと。それはもう軽蔑の眼差しで自分を見ているコトだろう、真正面に正座している女性：慧音を視界に入れない事に努めていた。

「……」

しかし、時間が経過するほどに妹紅は紙切れの存在が気になって仕方なくなってくる…

けど、慧音を見てしまう事は、恐くてどうしても出来ない。

長い長い沈黙が続き

「……はあ」

とうとう慧音から、タメ息がもれる。

少し妹紅の体がピクンツと動く。

何時までも、こうしては居られないな…

さつきまで、どこかふてくされる様な態度で、横向いて頬杖ついてた妹紅にも、そしてまじめ臭く長引くばかりの情景描写にも限界が感じられる。

妹紅がチラツと紙切れに一瞥向けた瞬間を見逃さず、私は正直に思った事を言った。

「6点つて、妹紅…」

紙切れの名前は、テスト用紙。

外の世界でも、この幻想郷でも共通して人の学力を計る事に使用される紙切れだ。

100点で満点だが、採点するまでもない。

3点の問い、2ヶ所の正解以外は何も書かれていないのだから。

「け…」

「け？」

妹紅が震えだした。

まずい。キツイ言い方だったかも。

「けえ〜ねええ〜」

！？ うわっ

妹紅が泣いてるッッ！

さぞ自分でもショックだったのだろう。

こういうのは、やってみないと自分でも実力が分からないモノだ。だからもう、これ以上追い討ちかける様な事は言えない。

余程追い詰められていたのか、あれ程注意したのに、妹紅は名前を書き忘れてるのだ。

寺小屋で教えている子供達がコレをやったら、私は点数をつけてやらない事になっている…

そして、名前に”あたい”とか”さいきゅう”（最強か？）とかフザケたこと書いてくる奴には頭突きを喰らわせてやる事になっている。むろん0点だ。

そんな事を今の妹紅に言えるだろうか？
いや、言えない！

あううう…

つい泣いてしまった…

神妙な顔した慧音を見たら、情けなさで我慢出来なくなってしまった。

どうしよう。

しかも、今気付いたが、名前も書き忘れてる。

「いいか？妹紅」

「何度も言う様だが、一人きりの模試とはいえ、名前書かなかったら、零点だからな？」

…ってあれ程言われてたのに。

ゼロ点だ、これ…

ちくしょう。 何でこんな目にあわされなければ、ならないんだ。

そうだ。 あいつだ。

あの、黒髪の妖怪チビ兔が余計な事を言い出さなければ、こんな目には…

季節は梅雨入り少し前。

幻想郷。

迷いの竹林。

竹林の何処かにある、藤原妹紅の住居。

人里の寺小屋にて子供達や、時には妖精や妖怪の類いにも勉学の場を与えている上白沢 慧音と共に、6点…もとい0点の紙切れを囲う2人は、異なる様相の内にも同じ想いに駆られていた。

何とか…しなければ!!

事の発端は、永遠亭に住む妖怪素兎。

因幡てゐからの

唐突な…

「姫と焼き鳥って、どっちが学力良いの？」

こんな一言から始まる、売り言葉に買い言葉だった。

1話：お宇佐さまの迎え幡

迷いの竹林

永遠亭近辺

「てゐいゝ？」

「てえゝゐ？ 返事をしなさあゝい」

…いつもの呼び出しが聴こえる。

せつかく楽しく、皆（野兔）と遊んでいたのに。

「てゐい？ てゐい」

「何処にいるのお？」

また、いつもみたいに、スルスル隠れて兎（鈴仙）で遊ぼうか。

用事があるのは、お師匠様だろうけど、怒られるのは鈴仙だから。

「てゐてゐてゝゐ」

「出てきなさあゝい」

ほらほら月の兎が近付いて来る。

真面目さの中に、受け体質の見え隠れする声が、近付いて…

「てみちゃん…」
「どこかなあ…？」

…あれ？

真面目さと言つより…

優しさの中に恐妻体質の見え隠れする…

この声色は…

「てえ〜み〜…

優しいく間延びする声は穏やかに届いてくるが、皆がアツという間に散っていく。

「ちゃん」

まさに脱兎の如く…

は はうわバふわッ
ま まさか！

散り散りにも、皆決して、ある方角にだけは頭を向けず、去ってしまふ。

1人だけ取り残される、妖怪兎達の最長老。

小さな幸運を届けてくれる小さな詐欺師、永遠亭の因幡てみは、野兎達が一羽たりとも向かわなかつた方角へと、全力疾走で駆けて行

った。

「ししよ〜!」

「し 師匠お〜!」

「あらあら…やっと出てきたわね」

永遠亭に住み薬屋を営む、私の師匠。

月の頭脳こと八意 永琳は、満面の笑顔だ。

「もう30分 も、探し歩いていたから、30分前に出来た用事が、
てゐにあるの」

「……」

笑顔だけど、イラストに描くなら、目の辺りから上のフェイスに
陰をかけなければならぬ。

とりあえず私も、笑顔になっておこう。

「そうでしたかあ」

「ずっと、姫様と横に長い携帯ゲーム機で遊んでましたので、気付
けなかったみたいです」

「ごめんなさい。師匠」

「…そうだったの」

「そんな事情があったのなら、仕方ないわね」

心なしか、イラストに描いた際の師匠の顔から陰が消え去った気がした。

「それでね…てゐ、

ここで…師匠、永琳についての注釈がある…

師匠は、声色などでは、そうそう感情を気取られる様な事などない。しっかり制裁を与える形で初めて、怒っている事を伝えようとするのだ。

永遠亭に住む住人であれば、カン的な防衛本能とかで察しているが…

たとえ超絶鈍感な人間（白黒魔法使いとか？）ですら震え上がらせる程の怒りを内に抱えたままでも、朗らかに野兎達と戯れている。

それが、八意永琳。

何が云いたいのかと言うと、私と遊んでた皆を脱兎させたのは、師匠の声色とかではなく…その師匠の後ろ辺り…

…用件と言つのはね、

後ろというか、師匠の腰の辺りから…尋常じゃなく厄い気配が漂ってくる…その何かが、声に乗ってきていたのだ。

この距離に来て、ソコに気付いてから、もう…私のささやかな幸運も掠れ消える思いがしてならない。

…、藤原妹紅に喧嘩売りに出してしまったままの姫を、迎えに行つて欲しいって事なの」

師匠は満面の笑顔だ。

目の辺りに陰を入れる必要はない。

「……」

私も笑顔のままだ。

目の部分も見えないくらい、真っ黒な陰で塗らなければならない。

「本当はづどんげに頼んでも、いいんだけどね」

「生憎、人里へ薬売りに出向かせているから」

「私も、食事の準備やら仕事やらで、忙しいし」

「だから、てみにお願ひしたいのよ」

それは・・・

正味な話、

めっさ面倒臭いです。

なんて、全棚上げた本心が、丸々悟られてしまっているらしく…

「そう…、めんどいの?」

「それは困ったわねえ」

そう言つと師匠は、腰の後ろ辺りに下げた、ガラス製の瓶に手を添えて、横の位置に回してきた。

覗き見える黒い丸薬

オオオオオ〜ン…

そんな禍々しく、圧倒的な存在感が、容器や空間境界も飛び越す感じで、一気に背筋まで染み憑いてくる。

最近の師匠の薬は、ガラス瓶ではなく、もっと柔軟性があって壊れにくい材質の容器に保管されている。

ガラスの瓶に入れられるのは、液体の薬か…

師匠のお気に入りとなった薬だけだ。

ガラス瓶のラベルに、お馴染みの八意印と綺麗な墨書の薬品名が。

コチヨウムガン
胡蝶夢丸ナイトメアタイプ

はうッ！

あれは…アレわーッ

でもアレは、ガラスじゃない容器に入れられていた筈なのにッ
それに、これ程迄に厄いブツではッ

ふと薬品名の下部に目を移すと、小さく見慣れぬ筆跡の文字が。
…そこには、
こう書かれている。

紫印の

FANTASIA (壊笑)

「はいッ！はいはい！行きマス！」

「師匠おお！是非に姫様のお迎えに、行かせて下さいッ！」

「そお？ 残念…あ！助かるわ」

「それじゃあ、姫のお迎え頼んだわよ」

師匠が去って離れていく時、微かに舌打ちッぽい音が聞こえた気がした。

(…怖ろしい人ッ！)

2話・もこかく永夜抄

・・・なあ？

今夜は私と夕餉にするんじゃないのか？

なのに、いつまで

続けてるんだ？

なんて事を、思ってみたけど、妹紅に伝わるわけじゃなし…

いや、たとえば声に出した所で、届きやしないだろう。

だが、言ってみる。

「なあ。もう、止めにしないか？」

…やっぱり、聞こえちゃいない。

永い。

今回は永い。

…本当に永い。

理由は多分、二つ程だ。

一つは、兎が迎えに来ないコト。

いつもなら、大体30分前くらいには迎えに来るのだが…まあ、それは正直どうでもイイ。

問題はイマ、ひっちゃかめっちゃかヤリあつてる、当人達だ。

以前なら、アイツの命令で兎か永琳が、無意味な襲撃に来たもんだが…

巫女と妖怪の組合せがやって来て、それはもう何回もボッコボコにされてからというもの、何かやたらと、直接アイツが喧嘩売りに来る事が多くなり…その闘争時間が日に日に永くなってくるんだ。

なんせ、元々犬猿の仲。

それが、わざわざ向こうから顔見せに来て、襲いかかってくるんだから。

もう、一巡して仲良しなんじゃないか？」

…間違っても口に出したら、妹紅に何ヶ月間、口きいて貰えなくなるか分からないが。

「仲良くは、見えないケドねえ」

「はうわバふわッ！」

「しまった！ 声に出てたのか！」

「ども」

「な 何だ、兎か」

「珍しいな。お前の方が来るなんて」

「月の方は、どうしたんだ？」

「鈴仙はストレスに障る厄い悪夢に祟られたから、お腹壊してお花畑に住まっ子になってます」

（きつと、そうさせてやる予定）

「そ そうか…それは難儀な事だな」

「でえ…姫様迎えにきたんですけど…」

「…何処ですか？」

「（分かってるだろうに）さっきからソコで、ぐっちゃんぐっちゃんに、肉弾戦してるのが”ある”だろ」

「それ等ですか？」

「そう、ソレ等だ」

「今回は特別酷くてな」

「最初は派手に弾幕戦してたんだが…」

「何故か今回に限って、”ニート”がどうの、”もこたん”がどうのと、分からない単語を言い合い出してなあ」

「あんまり大きな声では云えないが…最終的にはいつも、こんな非スperl非弾幕の肉弾戦になるんだが…」

「今回は特に尽きないんで、私も困ってるんだ」

そうしてる間にも、めっちゃん、めっちゃん鳴る効果音が響いている。

「まあ、動く肉塊のシ合いにしか、見えないだろうけど…」

「………」

「ちょっと」

「ああ、そこら辺に茂みあるから、行つといで」

キラキラキラキラ

キラ キラ キラ キラ

最年長の妖怪兔をキラキラさせる…そんな、現状だ。

あゝ あゝ ああゝ…
あー あー あああゝ

益々、輝夜ファンともこたんファンには、お見せ出来ない惨状に…

こんなの、巫女に見られたら、何云われるか分からないな。

…あの巫女なら、放置してくれるかも知れないけど。

「おまたせ。スツとしたら、もう慣れました」

「そうか、そうか」

「なら、さっそく連れ帰ってくれ」

「まあまあ…折角来たんだから、もっと見てようよ」

「もっと、台詞だけで、進めてイこうヨ」

「いや…連れ帰ってくれよ（最後の何だ？）」

「私はもう、見飽きた」

「いやいや…何かもう少し待ってたら、小さな幸運的な面白い何か
が、起きそうな…」

「あ！ ホラ、何か！」

「ほ…ほんとだ…何か来た」

「ホラ、隠れて隠れて」

「えっ…お おう」

（何やってんだ、私は…）

…猫だ。

猫の妖怪が来たな。

何持ってんだ？

何だ？あの丸いの？

”1” って数字書いてあるが…

あ！ 今、妹紅達に近づくと危な…あッ！

あー妹紅の蹴りは痛そうだからなあ

結構飛んだなあ…

あ…狐きた

アイツ確か、巫女と一緒に妖怪が連れてた…

慰めてる慰めてる

アイツ何で鼻血出してんだ？

おっ、お前も妹紅達に近付くか。

何がしたいんだ？

出た！丸い1番！

それ、そんな大事か？

ああッ！

輝夜と妹紅の絶妙な時間差2連蹴りが顔面にッ！

アイツ等、

息ピッタリだな。

おおっ！ 狐耐えたッ

おおーッ、妹紅を卓袱台返しにッ！

少し許すまじッ！

なッ遂に丸いのがッ！

丸いの割れたッ

何だ？巻物か？

!!!? 「ま まさか」

「私に似た程度の能力を」

「あッ、折角面白くなりそうなのにッ」

「ま 待て、狐え！」

シユルルル ルル〜

妹紅と輝夜の顔に、手のひらサイズの丸いのがら出た、小さい巻物が降り掛かってからと言うもの…

二人とも、急に動きを止め、二人して一つの巻物を読み始めている…

何らかの攻撃かとも思ったが、むしろ二人の躰は、どんどん見れたものへと戻っている。

…そんな小さな巻物の文字が読めるのか？

「藍しやまゝ、鼻血？」

「これはね、さっき蹴られたからだよ？」

…それだけでは、ないと思う。

「……」

「どうしたんだ？」

「姫が何か読んでるの、初めてみた」

「そうなのか？」

「妹紅は、そこそこ本を読んでも思うが…いや…そう言えば、見た事ないかな」

二人の体の全快復には、まだまだかかる…

取りあえず、姫の読書と体が落ち着くまで、猫をからかって遊ぼつとも、思ったが…

九尾の狐が、（邪・魔・す・る・な・ヨ）と言う獣の妖怪間での

み成立する意思表示を出してきたので、止めておいた。

因幡てゐは心底、退屈してきた…

そう、幻想郷の妖怪にとって、それは何か異変を巻き起こしたくなる…

そんな、

前兆なのであった…

2話：もこかく永夜抄（後書き）

出来ましたら、

皆さんの感想やメッセージなど頂けたら歡喜絶頂です

これからも、

” 東方もこけね勉学抄”
を宜しく願います。

後、藍さんの放った「丸いの」と「巻物」は、実は私の他の作品である、

「景品の出る東方賽銭箱」のザッピングだったりします。

3話：文の手帖と眠らない夜

どこまでも晴れ渡る空

今日の、妖怪と神様達の住まう山は快晴。

梅雨入り前の涼しげな風が、昼時の幻想郷を流れゆく中、もう幾いく月か先の秋空にも映えそうな鴉天狗が、憂鬱つぎな気分で、流れる様に飛んでいた。

何もお〜

ほんとお〜に何もお〜
ないなあ〜

幻想郷の珍事大好き、幻想ブン屋。

二言目には、” 真実しか書きません ” のゴシップ収集に余念が無い射命丸 文には珍しく、完全にネタが尽きていたのだ。

何でも良いからッ!

誰か何かを巻き起こしてくれないかなッ!?

今日みたいに、本当に小さなネタすら見つからない様な日は、特に強く事件を渴望してしまう。

今の彼女の前で、何かしらの騒ぎを起こそうものなら、疾風迅雷

が如き勢いで、記事にされてしまつたろう。

彼女なりの”真実”の解釈に基づき、大仰なヒレが幾つも付いた内容で。

文々。(ぶんぶんまる)新聞の取材手帖のネタストックは、兎に角^{こかつ}涸^こ渴^{かつ}している。

特に異変も無く、もう記事にもならない程、お馴染みに怠惰な茶飲みをしている巫女の神社を。

特に異変も起こさず、外見は静寂に佇むばかりの紅魔館と美しい湖を。

もう桜も舞わず、しっかりと閉ざされた…が、ずっと上がっていけば越えられるらしい、冥界への門前を。

魔法の森…三途の川に無縁塚…一応、河童の河と滝、湖の神社も…

今の私がこれだけ飛び回っても、何も見つからないなんて。

ああ、事件が欲しい、騒ぎが欲しいよお…

すっかり無気力になってしまった文^{アヤ}の遊覧飛行も、気付けば真夜

中まで続いていた。

あややヤッ

もう、こんな真っ暗になってたんだ。

ずっと外にいたのに、今頃気付く。

やや鳥目気味の文は、夕闇時ゆづやみ下キには帰るのだが、今はすっかり夜半の帳とほじがおりきつている。

一緒にくっ付いてた遣いのカラスも、いつの間にか塹ひぐの中だ。

元々緩めになっていた気力が更に緩むと、猛烈な欲望が爆発した。

お お おお おッ

今日1日、1回しか満たされなかった欲望が。

「お腹すいたああ！」

すいたあ

すいたあ

蹴飛ばす石の音も風に乗る、静かで澄んだ幻想郷に、腹減り天狗、魂の叫びが木霊する。

普段は出さない様な大声を爆発させたら、頭がぐわんぐわんしてきた。

頭がぐわんぐわんしてきたし、お腹のあたりが、凄く切なくなってきた。

色々悲しくなってきた。

そして、まだ行ってない場所が、ふとよぎる。
竹林あたり行ってない…

もう、文さんは少し壊れ気味になっていたのです。

だから、しょうがない事なのです。

「そっだ！（大声）」

「焼き鳥食べようッ！」

壊れ気味になっていたのです。

その日一番の風切り音も、遙か後ろに置いていく風神少女。

お腹もネタも思考力も涸渇させ、迷いの竹林に一直線。

今の文さんなら、なんでも吸水する事でしょう。

梅雨入り前の微かな湿気でも、鳥肉でも何でも。

3話：文の手帖と眠らない夜（後書き）

当初の予定で2話の続きの展開に至る前に、ちょっと時間を戻す
数行程度の伏線だった、お昼の文さん。

しかし、1話分丸々繰り上げてしまいました

「やっぱり私は、東方キャラの中で一番文さん好きなんだなあ」

4話：普通の因幡と素因幡

草木も眠る丑三つ時

…かどうかは定かでないが、今の幻想郷の竹林は、妖怪の時間。
霊夢はすやすや
魔理沙もぐつすり。

そして、数刻前まで色鮮やかで美しく幻想的な焰ほむと五色の閃光が
満ち溢れ。

数刻後には、心清く儂き老夫婦の、仲良く洗濯に勤しむ水音みた
いな音や、可愛らしい胸きゅん野兎の群れが、顔をうずめる勢いで
大量の桃を貪り咀嚼そしゃくしている様な音がエンドレスに轟いていた竹林
の一角も。

しん…と、物静かな景観を取り戻している。

迷いの竹林
閑雅な一角

いつの間にやら、気の合う仲間で、お花見ならぬ竹見を催し、各
々好きに自分の時間を過ごしている…様な体（てゐ）が出来上がっ
ていた。

妖怪の式神である九尾の狐、八雲 藍。
その藍らんの式神である化猫、橙チェン。

この妖怪の式と、妖怪の式の式は、主が日跨ぎで寝ているのか、予め許可されていたのか不明だが、何時までも留まり2人ではのぼのぼした空気を発している。

体から微かに燻くすぶる煙りを立てながらも、すっかり元の体となり、”自由に文脈綴る程度の能力を持つ誰か”の都合により、弾幕戦に負けた時程度に修復された服装の、蓬萊山 輝夜と藤原 妹紅は、とても仲良く小さな巻物を読んでいる。

そして本来なら、今頃は妹紅との夕餉すら終わらせていたであろう上白沢 慧音はというと、正座をやや崩したように座り、膝の上に数枚の紙切れを広げ、何やら押し付けると赤い軌跡を残す棒切れで、やら×やらの記号を記しては、上機嫌な表情を浮かべたり、かと思えば、険しい表情を浮かべたりしていた。

…これは、なにをやっているのだろうか？

各々が本当にしたい事している中、1人だけ退屈な思いをしていた因幡てゐは、やっと興味の引けるものを見付ける。

といつても一応、野兎達を数羽呼んでみて、（暇だねー）、（お腹空いたねー）などと戯れていたのではあるが…

「ねえ、ソレなにー？」

「ん？ これはあ…って、うおわッ！」

ちよつと40羽程の数羽の兔にもつさり埋もれ気味で、慧音の膝に身を乗り出す妖怪兔。

（なにー？）

（それなにー？）

と、野兔達も興味津々だが、勿論慧音には届かない。

「これは、テストの答案用紙で…折角だから、いま採点をしている所なんだ」

「てすと？何のてすと？」

「私が教えている子供達の、学力テストだよ」

「最近は、やや難し目な所に入ったせいかな、テストの結果にバラつきが、目立ってきてなあ」

「どんぐらいのペースで授業したものか…」

言葉尻の印象以上に深刻な悩みらしく、人里の寺小屋教師は、かなり憂鬱そうな表情をしている。

「そればかりが、悩みの種になってるよ」

「いつそ、みんな揃って教えた事、満点で返してくれれば、スッキリして良いんだけどなあ」

「それが私の夢の一つだな！」

満点とやらの紙切れを抱いてる所を、夢想でもしているのか、かなり表情が緩みだす。

「そんな夢なら叶える方法ありますよ？」

「なにいいッ！」

「いや、待て」

「どうせ月人の妖しげな薬物だろ？」

「そんなモノに子供達を関わらせるわけにはいかないぞッ」

「いやいや…飲むのは人間の子供じゃなくて、あなたですよお」

「薬物ではあるんじゃないかッ！」

「コチヨウムカン胡蝶夢丸ツって云う、八意印の直販薬」

「それ…アレだろ？」

「以前、鴉のブン屋が”号外”とか言っツて古い記事バラ撒ツいてた時の…寝た時の夢見が良くなると云う　　紅い方の丸薬」

「そうですヨ？」

「知ってましたかあ」

悪気の無い眼差しの素ウサと、つぶらな瞳を向ける野ウサ。

「う　　気持ちは有り難いのだが、夢の中で満点出されてもな

あ

「もしかして、違いましたか？」

（ちがうー？）

（ちがうのー？）

「うう た 試してみても良いんだが…」
「あんまり、そっちの方と関わると…その…妹紅と気まずくなる…から」

「わかりましたあ」

「それじゃあ、しょうがないですね？」

もちろん故意である。

色々分かっていて、面白半分にからかつてみたのだ。
買ってもらえたら、更に良かったのだが。

カサッ

ん？

不意に枯れ葉のこすれる様な音がする。
姫と妹紅が、読んでいた巻物を落としていた。

「あゝやっとな終わったのですか」
スキマ妖怪の式、八雲藍が、式の橙チェンを引き連れ、いつの間にもやら
巻物を回収し手にしていた。

「異常に時間が掛かってましたねえ」

「お二人共、文章読解するのが苦手なのでしょうか？ 極めつけに」

いつまでも静かな2人が気になり、様子を見てみると、何か茫然
自失な感じている。

「おまえらッ」

「妹紅に何をしたんだ」

「大体その小さい巻物は何なんだよッ！」

「この巻物は、月人の薬物程に危ない代物ではないので、御安心ください」

”御安心ください”と言う狐の胡散臭いニヤニヤ顔が、御安心する気にさせない。

「では、私達は紫様のお言い付けを果たしましたので、失礼ながら、もう退場しますね」

慧音が何か言いかげようと口を開く前に、狐達の頭上にガバツとスキマ妖怪の裂け目が開き、大量の若葉が降ってきた。

ザザザザー

ザツザザー

それはもう大量に。

ちよっ ゆ 紫様

おお 多す ぶフツ

みゃ〜

そんな苦悶の呻きが漏れ聞こえてくる。

木の葉隠れの術の積もりだろうか。

山の様に積み続けられる緑色の木の葉（どっから摘んできたのか）を横から掻き喰らう様に、裂け目が浚さらい、葉だけ残して消えてしま

った。

風が吹き込み、木の葉を流していくと、四つん這いみたいになつて顔を地にうずめる形で昏倒している狐だけが、姿を現した…狐だけミスられたらしい。

「本当に何がしたいんだ。お前等は？」

「ゆ 紫様あゝ」

しくしくしく

奴はもう、当分は回収に来ないだろう。

「と、こんなのはどうでもイイ！ 妹紅は！」

二人はゆっくりと戻ってくる

薄ぼんやりと、意識が視覚の方に流れていき、自分が文字の”意味”を視ているのではなく、地面に落ちた”巻物”の残像を…もつと意識がハッキリしてくると、ただ”地面”を見ている自分に気付いた。

「……」

そして、顔を上げると、互いにぴったり肩を寄せ合って座り込んでいた。

「……………」

隣人の顔色が、凄い事になっている。

私もきつと、こんな蒼白な表情を晒しているはず。

誰かが駆け寄って来た。

そして、

「よかった…妹紅、無事か？」

「あ ああ、何とか」

隣人が応える。

そして私の方にも。

「姫えく、大丈夫？」

「 因幡も来ていたの？ それと永琳まで」

「心配しましたよ？姫」

普通のイナバをもつさり纏わせた因幡が、何故か妹紅みたいな表情で永琳を振り返っている。

「し ししよ」

「別に怒ってないから、安心なさい、てゐ」

「てゐが兎を呼んでいたお陰で迷わず来れたわ」

何羽か野兎を抱いたりしながら、かなりの上機嫌でいる永琳。

野兎と永琳を交互に見ながら、てゐの表情が段々と明るくなる。

だが、永琳の姿を目にした慧音は、流石に警戒するように身を硬くしていた。

そんな慧音に目を向けると真横から視線を感じ、ジッと妹紅に見られている事に気付いた。

結果、妹紅と視線がかち合った状態となる。

もの凄い至近距離で視線をぶつけている二人。

慧音、永琳も少し緊張した様子で二人を見ている。てゐは、他人事な様子で見ている。

先に口を開いたのは妹紅の方であった。

「びびってやんの」

！！？

なッ な

「なんだとツッ！」

「お前こそツッ！漏らしてんじゃないのか！」

「臭いんですけど〜」

「な・ん・だ・とおおおお！！！」

「や・る・かあああ」

慧音や永琳達がいるのも忘れ、焰の鳥やら五色の光やら展開しあう二人。

「お おい！もう止めよう、妹紅」

「ひ 姫！ もう帰りましょう！」

慌てて止めに入ろうとするが、中々近寄れないでいる。ただ、てみだけが本当に他人事だ。

姫がよく言うけど、アレは本当に”焼き鳥”だなあ、などと思いなから、慧音が下げている肩掛け袋に目が移った。

きつと、慧音が持っていた”満点”ではない紙切れが入っているのだろう。

やっと慧音と永琳が二人に取り付き、各々の連れ合いの存在に、落ち着きを取り戻し始める輝夜と妹紅を傍観していると てみ的には、発明と言ってもイイくらいの、本当に珍しく他意の無い純粋な疑問が駆け抜けた。

てみが緩慢とした足取りで、睨み合い取っ組む寸で止められている二人に近づいて行くので、野兎は次々と、てみから降りていく。

そして

ゆっ くりと、息を吸い込み。

「姫と焼き鳥って、どっちが学力良いの？」

5話・東方勉学抄

「姫と焼き鳥って、どっちが学力良いの？」

静寂『・・・・・・』

取っ組む寸での体制の妹紅と輝夜も。 後ろに取り付き、二人を止めている慧音と永琳も。

一瞬で喧騒を止めて、てゐに顔を向けたまま、ぼかーんとした表情で停止していた。

てゐは、ここ一番の邪気の無いわくわく顔。

「そ」

「そんなの私に決まってるでしょう？ 因幡？」

輝夜がほぼ反射的に返答していた。

「ねえ？ え〜りん」

ぐわんと顔を上げ、真下から永琳を仰ぎ見ると、

「え？ ええ、勿論ですとも」

一瞬反応を遅らせながらも、至極当然といった自信の窺える同意をくれた。

二人とも、もう月の事に関心をもつ気など更々ないが、月人の姫である事、月の頭脳と謳われていた事、その自負までをも放棄する気は持ち合わせていない。

その永琳の受け答えに過敏に反応をしてしまったのが

「つつつ！ つぶはッ？ は あはははははは」

「ヒッ くっククッ…」

「も 妹紅？」

妹紅であった。

慧音は以外にも、さほど興味をもっていないらしく、堰を切った様に笑い出す妹紅に、戸惑いの色を見せる。

はっ、と輝夜達の方に目を向けるが、まだ不快な様相も見せず、むしろ爛々と目を輝かせて反応を傍観している兔が、何かムカつく。

「フははッ そりゃあ、お前はデキるだろうよ。永琳」

「でも、輝夜はなあ」

愉快で堪らないッ とでも言う様な口調の妹紅。

ここからじゃ窺えないが、きつと侮蔑に満ちた表情を浮かべているのだろう。

「私は何だつて云うのお？ 焼き鳥い？」

つまり、コイツのそんな表情。

「お前から、知性なんて感じた事無いなあ？」

「引きこもってばっかで、人を卑しめる事以外に頭使った事無いんじゃないかあ？ 地上でも月でも」

普段は憎しみを込めて私に打ち明けている愚痴を、ここぞとばかり。さも楽しげに投げつけている。

「なあ？ けえ〜ね」

今度は、妹紅がぐわんと顔を上げ、真下から私を仰ぎ見る…。「へ

あ？ え… あ、えと」

「ごめん、もこお

私は教育者だ…

いきなりそんな事聞かれたって、いま誰が劣ってるとか、そんな事パツと言えない性分なんだ…

「……」

うう 妹紅の目が痛い

視線が刺さる。

気がする。

見れないから、分からないけど。

そんな真下から凝視しないでくれえ。

抑え込んでるのは私なんだけとおおお！

「あらあら…そちらの相方さんは、何だか受け答えが、しどろもどろねえ？」

永琳の奴が、打ち勝ったとばかりに畳み掛けてきやがる。

くっ くやしい

何故だ慧音？

何故乗っかって来ないッ

…ま まさかッ

「…輝夜に有って、私には教養が無いとか、思っただのか？」

「いやッ！ そんなコトはない…」

「上を見るなよ。こつち見るよ慧音 けい…あ

「…」

「学問の専門家が、教養無いってサ。 妹紅お」

「姫？ そんなハツキリ言ってしまうと、また卑しめるとか云われてしまいますよ？」

「あら、良いのよ」

「私は卑しめる事にも、頭を使う事にはしているのよ？」

「ただし、卑しく盗み食いする卑しい蓬莱人限定だけどね」

『あははははは』

姫と師匠が、珍しく大声で笑い合ってる。

顔を見合わせて愉快そうにしているけど、私の見立てでは、二人共かなり不快そう。

でも、これは焼き鳥組の あ

「誰が卑しいって？」

「よもや、妹紅の事じゃああるまいな？」

「はッ きつと自分達の事サ。 慧音」

「故郷でも地上でも、手当たり次第に貶めて卑しめている内に、蔑んだ他人と蔑んでいく自分との区別も、つかなくなってるんだらうよ」

戦意に満ちた不適な笑みを浮かべる妹紅と、緑髪に牛の様な角、別人の様な容姿と覇気に満ちた眼差の、凜々しい慧音が、サアアアと冷温な光に射し照らされている。

雲間から、闇夜の僧衣を剥ぎ裂かんと蒼身を晒す完全な月。

そう、今宵は 満月

よっしゃー！

これで、また面白い展開に盛り返すよ。

そういえば、何でこんなオモロい事になってんだっけ？
どっちがオツム良いか聞いたただけなのに。

ま、いつか

「あら…先生にツノ出た途端、元気になって」

「元気ついでに、その無教養な頭にも知識を詰めて貰ったら？」

今度は一切不快感を隠さない声色で、姫が仕返ししている。

師匠も無言だけど、さっきよりも不快を隠しきれしていない微笑で
焼き鳥組を見ている。

「お前に無教養云われると、私がお前より学力劣ってるみたいじゃないか？」

「お前こそ、頭上の賢者に文法でも教わったらど！ムグッ
ン？」

「もう良いだろ、妹紅」

「どっちが頭良いとか、そんな論争 くだらない」

先生がいきなり意外な事を言い出す。

が、ここで師匠が深く息を吸いはじめる。

「まだ、話は終わっていないわ。 慧音先生」

「私達も、もう、このまま引き下がるわけにはいかないみたいなの」

「わかってるじゃない。 永琳」

「もう、スツキリ片をつけないと夕餉も通らないわ」

永遠亭は、完全にやる気になっている。

焼き鳥も口を塞がれるままに、眼光の戦意は微塵も消沈していない。

「勘違いするなよ」

半獣も、

「言い争い”が下らないと云ったんだ」

なし崩し的に解散させる気では無かったらしい。

「ツツぷはっ、そうだ！ こんな罵り合いしていても埒が開かないッ！ なッ？ 慧音え！」

「そのとーりだ、妹紅」

「この幻想郷で、そんな決着など着くはずが無いッ！」

『~~~~』

互いに睨み合う、永遠亭と焼き鳥組。

満月の冷光の下、閑雅な竹林の一角は一触即発の緊張感の為か、
風にそよぎ擦れるシャン、シャンと鳴る笹の音も

薄い雲間に度々霞む、月の光の劇しくチラつく明暗も

そして、高々と聳える竹のぶつかり合う音…

カッ カッ

風や天が奏でる自然の声を…ただ傍観しているだけの私ですら、
何も意識出来なくなる

二組の間合いに真の静寂が出来ている。

限界まで凝縮する爆発寸前の大気が自然への意識も引き込み、竹
と笹の音、月明かりのチラつき…いつの間にか、本当に風と光の変
化が止んでいた。

真の静寂は、何かの瞬間を待つかの様に。

脅威的な爆発力を秘める4人の気が、静止した竹林に無音無風の
鳴動を錯覚させる。

てゐは、完全に吞まれている。

怒気、敵意、戦意、覇気、ない交ぜの威圧に当てられ、兎の妖獣も

「えあッ い いつい 五日？」

「五日後ですねッ」

「決・定・で・す」

きゆるルるるうく

「妹紅さん！輝夜さん！ご健闘をお祈りします！」

「でワ！ 刊行急務が待ってますので！」

ヒュッッ

刹那に記者は消え、

烈風と轟音が色々なモノを掠め去って消えた。

「永琳、 あの鴉…完全に月の妖気に持ってかれていたわね」

「ええ…これでもう引き返せませんわ」

「輝夜あ」

「五日後だそうだ。覚悟しているよ」

「格の違いを知らしめてあげるわ？ 妹紅」

「ふんっ、云ってる！」

「慧音、帰ろう。こんな月夜に何時までも空腹でいるのは、毒だ」

「ああ、早く夕餉にしよう。あんな（鴉）には、なりたくない」

妹紅と慧音は、足早に竹林の間へと去ってしまふ。

「てゐ？ 帰りますよ」

「はわ？」

「なにボツとしてるの、因幡？ 私を迎えに来たんでしょ？」

「あ あッ はい、帰りましょお」

カサツ カサカサツ！

「文せんぱあ〜い！」

「今度は、なにい…」

輝夜のげんなりした口調に見合つ、永遠亭のうんざり空気。

「文先輩は？ 文先輩は？」

「文先輩が、来ませんでしたか？」

「因幡、こいつ誰？」

「私は、知りません」

「天狗に見えますけど」

「ああッ！ 失礼しました！」

「私、守矢神社のある妖怪の山で、縄張り偵察的な任に就いており
ます、白狼天狗の犬走 椀と申します」

「文先輩がご飯抜きに満月の宵にも帰らないと、山の鴉が騒いでい
ましたので…このッ」

ズハッ！つと一段の重箱弁当を掲げる。

「もみじ特製！化身視点緊急仕様、文さんカスタム弁当お」

「妖鳥オーケストラ」

カタカタカタカタカタカタカタ

扱った麻縄でギチギチに縛られた妖鳥オーケストラの蓋が、何やら不吉な狂奏を奏でている。

永遠亭一同は、平穏な夕餉を守る為、深く考えない事にした。

「鴉天狗なら新聞発行の為に、去ってったわ」

「そんなッ！死ぬ思いして、リグ『云わなくて、良いからッ！』」

「帰ろう、え〜りん」

「ほんと、もう帰る！」

「はい。帰りましょう」

「あっ そうだ」

「てゐ？」

「はい、師匠」

ちよつと前を歩いていたら師匠に声をかけられたので、振り返ると。師匠が高々と片足を上げる、投球フォームをとっていた。

薬符「胡蝶夢丸ナイトメア 紫印のFANTASIA」

「えいつ」

ヒュン！ごっきゅん

いま、初めて悟った。

何時までも姫を連れ帰らず油売ってた事を、師匠は最初から、めちやめちや怒っていた事を。

激昂したまま、輝夜に駆け寄る永琳。

激昂したまま、野兎と戯る永琳。

激昂したまま、輝夜に取り付く永琳。

激昂したまま、口争う永琳。

激昂したまま、二話間を軽く跨ぎきる永琳。

それが、八意永琳。

あ、これはもう出発の時が狂^{クレ}な っ て思う寸前の物質世界最後の光景は…丸薬三錠分くらいのガラス小瓶のラベルの墨書であった……………

無 臭 性

…ドサツ

椀の見える所で、小さい兎の妖獣が、極楽の境地に達した様な悦楽の表情で倒れる。

なのに、体が劇物をラツパ飲みしたかの様にギツクンギツクン跳ね出したり、震えたり、何かを掴みまくる様な危険な反応を繰り返す。一瞬ふわっと、黒い霞みが見えた様な気がして消えたが、気付くと野兎が全部竹林の奥に消え去っていた。

「あなたも、もう帰りなさい？」

兎を背負いながら、何かを成してスッキリした、心からの笑顔が

椀に向けられている。

あつと言う間に、帰っていく白狼天狗が見えなくなると、きびすを返して輝夜のもとへと戻る。

「やっと、本当に静かになったわね。お腹空いたわ？ 永琳」

「はい 帰りましょう、輝夜」

もう2人以外に、誰も動く者の居ない、静寂とそよ風の竹林。

今宵、人妖を魅了する真なる満月の下

静々と各々の帰途を辿る幻想郷の住人達を

幻想的に揺らめき聳える、蒼い竹の音^ネだけが迎え続けていた。

紫乃ま・・・

私はいつまで放置

5話・東方勉強抄（後書き）

アレですね。

難しかったです。”喧騒”を綴ると言うのは。

難しいとは思っていたけど、本当に難しかった。

結局、感情的な喧騒と言うよりも、完全に私の好みに則った理性的な流れとなりましたが、

そこは、「文さんが本能のタガすら外してくれたのでヨシ」って事で

藍さま？ そんなの登場させてたっけ？（笑）

6話：ジャーナリストティックオブフォー ル 文めく朝

「お〜がぁい」

「号外ですよ〜」

あくる朝。

幻想郷の朝まだき。

その号外は、珍しく号外らしさを果たしていた。

誰も知らない最新のスクープ記事。

なにせ、記事に書かれている当人達でさえ知らない事項が掲載されているのだから。

「何処よりも誰よりも、早く確かな文々。新聞の大々スクープですよ〜」

疾風ハヤテの如き疾駆と豪快な手際で、辺り構わず種族も構わず、号外新聞を配って配って翔て駆け舞っている天狗のテンションも尋常な

ものではなく。

テンションだけには収まらず、他にも色々振り切れていた。

「また古い号外か？」

「私の事以外な古い話は、飽き飽きだ…ぜ?…」

「あのカラス、あんな色してたっけ？」

まず毛色からして違っていた。

見慣れた黒っぽい翼の残像は見られず、かわりに白っぽいフワフワした感じの残像が目に残る。

視覚の端に、尾を引く感じで目に残る。

バツサツ！バサバサツ！

「うわ！なんですか！」

「ああつ！中にまで入ってく！どんどん入ってく！」

「咲夜さんに怒られる！」

「メイリン美鈴。あなた何部程まで勝手に契約とったのかしら？」

「は はうわバふわッ」

「咲夜さん、違うんです。カラスがツカラスが勝手に」

バツツサ バサバサバサ

バサ バサ バサバサツ

「……」

「勝手にやっってるんです」

節度と云う事を欠いた様な配り…撒き方も、内容は兎も角仕事はキツチリ正確に行う天狗の記者らしからぬ乱舞っぷり。

雑と云うより初めての新聞配布に、完全にはしゃぎ舞い上がっている。

「あなたの役目は何だったかしら？」

「不審な侵入者を、紅魔館の門前より内側に入れない事と庭園の管理ですッ」

「違うわよ？」

「違うんですかッッ」

「不審な侵入者と侵入物を、紅魔館の門前より内側に入れない事と庭園の管理よ」

バサツバサバサ…

「……」

「すみません」

「幸い内容が面白そうだから、お嬢様用に一部貰うけど、一部あれば充分よ」

「他は全部不審物」

「門の周囲と庭全部の不審物を、何とかしておきなさい」

「勿論、お嬢様がお目覚めになるまでによ？」

「はいッ　　え！1人で全…はヴわッ　分かりましたあああ」

盾持つ腕には盾に代わる巨大なりユック。
剣持つ腕には剣技に代わる新聞配舞が振るわれる。

幻想郷を翔カケ駆け巡る、千里先まで見通す伝統の幻想ブン屋！

犬走　椀！

「号外いい〜」

ブンブンッ　バツサバサ

「号外、号外だよ〜」

バサバサバサバサッ

「紅魔館は使い魔入れて6割増で〜」

「妖精メイド沢山沢山」

バツサ　バツサ　バツサ

「妖精人妖亡霊半霊」

「萃あつまる神社に、盛り沢山　盛りだくさああああ

「神社にゴミ撒くなああああああ！」

『博麗弾幕結界！！』

ルナティックな大結界が一日ブン屋に展開される！

ピツツツ チュウウウーーン

「わっきゆううう〜」

「あれ？」

「新聞、ゴミみたいに棄てる鴉を撃ちピチユる積もりが、ワンころ天狗が墜ちてきた」

「つて事は、新聞みたいなゴミを棄ててたな！」

「違いますッ」

「違いますよッ」

「新聞みたいなゴミではなく、新聞を配っていたのです」

「きつと、あなたの御役目ではない」

「誰も彼も読まなくなってゴミ（塵）に昇格したゴミ（新聞）を私の神社に廃棄するとは、良い度胸ね」

「守矢の神社にでも廃棄していれば良いものを」

まだ怒りに身を震わせている博麗の巫女。

いまや境内中に新聞が散乱している。

無論除去を強いられるのは神社の巫女だ。

腰を掛けるのに丁度良さげな箇所の新聞が散り散りに引き裂かれている。

その紙が眠りを妨げたのだろう。

お饅頭を載せていた皿と湯呑みが、新聞と一緒に地面に転がり、新聞と巫女の白い袖ソデがお茶色に染まっている。

その紙が巫女の沸点を一気に引き下げたのだらう。

一銭も中身が無い賽銭箱に、しこたま新聞が投函されている。

この皮肉が、巫女の怒りにトドメを刺していた。

「犬・鍋・にしてくれるううううう」

ジリジリと食材に近づくと妖怪退治屋。

その肩が、ポンポンと唐突に出現した手に優しく叩かれ、聞き慣れた妖怪の声がかけられる。

「落ち着いて、霊夢」

「人間が妖怪を食べるなんて、本末転倒よ？」

だが、一蹴される。

「幽々子が食べる」

「あら嬉しい、美味しいお歳暮なら年の瀬でなくとも大歓迎よ」

これは、亡霊（幽々子）の声。

「鍋もやるのか？」

「鍋に合うキノコでも、持ってくれば良かったかな？」

これは、魔理沙。

「鍋までやるなら、夜まで先延ばしにしてくれないかしら？」

「お嬢様が起きるまで先延ばしにして」

この声は

「何で、主が寝てるメイドと寝てるはずの妖怪まで、こんな朝っぱらから集まって来るのよ！」

「来るなら、お賽銭入れるおおおー」

「賽銭入れようにも、箱があればじゃく入らないぜ？ 霊夢」

魔理沙の一言が、霊夢の視線と矛を再び天狗に向き直す。

「わふッ！」

「大体なんで鴉の廃棄物を、あんたが撒いて回っているの？」

尻餅付いたままの椀に、感情的でおっかない目つきの霊夢が詰め寄る。

「私も知りたいわ」

「なんで鴉の不審物を狂った弾雨みたいに、庭中降らせて回っていたの？」

無感情的で冷酷な目つきの咲夜が詰め寄る。

「そ　それが：文先輩が昨夜の号外刊行急務で燃え尽きまして…」

「どおしくしても翌朝中に配りたいとの文先輩たつての切望で、特例処置で私の代行配達が大天狗様に認められたのです」

「それで？ あっちこっちバラ撒いて、最後に私のお賽銭箱お？」

にじり寄る霊夢。

「幻想郷のナンがいる所に配り回れば良い」との文先輩の遺言で…」

「それで？ 庭園中に無節度極まる物量投下？」
にじり寄る咲夜。

「あれ？ 私の所は一部だけだったぜ？」

「…途中で楽しくなっちゃいました」

「何かその気持ちも分からないでもないな」

「紙撒くだけなら、楽しそうだ」

「そうですねですよ 魔理沙さん！」

「何かもう、舞い上がる新聞見てたら、楽しくて楽しくて」

「私も鴉に頼んで、撒かせて貰おうかな？」

「その気になりゃ、誰より早く紙を無くしてみせるぜ」

「魔理沙まで、馬鹿な真似しなくてイイの！」

「咲夜！ あんたにも言っとくけど、この天狗は渡さないわよ」

「わざわざ追っかけて来て御苦労だけど、神社の掃除をさせる方が先」

「その後は、幾らでも好きに引き回せばイイ」

何かしらの反論を予測していた霊夢だが、咲夜は事も無げにサラリと流す。

「家の庭なら門番の責務で間に合ってるから、別に犬手は要らないわよ?」

「追っかけて来たんじゃないの?」

「偶然よ? そんな事で神社まで来たわけじゃないわ」

「もく、じゃ なんだって、あんたも紫も魔理沙も幽々子も、ぞろつぞろと寄って来るのよお」

「あら? 私は確か犬鍋にお呼ばれされたんじゃないかなかったかしら?」

「お呼びしてないッ」

「安心しろ霊夢」

「そんな小さな疑問は要らなくなるよ」

「多分、もつと来る」

「だから、大きな疑問用に空けておく事をお勧めするぜ」

「ええー!」

「一体何する気なの」

「何する気って云われても…私は何もしないぜ」

「まあ、これ読んでみる」

と、魔理沙が散らばっている新聞を適当に拾い上げ、霊夢にかざす。

「新聞なんて、もう見飽きたって」

「新聞見るのに飽きてても、新聞記事見るのには、まだ飽きてないだろ？」

そう言われてしまい…努めてクールダウンしながら、新聞記事に目を向ける。

「あ、でも新聞なんて一部あれば充分よ？」

「他は全部資源ゴミ」

「ゴミ撒き天狗は、境内全部の資源物を、その回収袋（椀のリユック）に詰め戻しておきなさい」

「はい…えッ1人で？」

「1人で撒けたのだから、1人で戻せる」

「後、お賽銭箱に確か幾千円が入って（嘘）いたから、紛失したら幾千円程でも入れておきなさい」

「そんなああああ！」

そう言いながらも、律儀にせっせせつせつと、資源物を回収袋に戻していくワンこころ天狗。

もちろん手伝う者が出てくる事など絶対ない。

「あの鴉だったら、適当な理屈出して、上手い事逃げてくださるうちにこの辺が、下っ端の下っ端たる所以ゆえんだな」

「魔理沙、見にくい」

「しっかり腕を伸ばして、震わせないで」

「霊夢　自分で持って読んでくれないか？」

あくる朝の幻想郷。

灰敷き風舞い、幽玄風情な博麗神社と巫女の朝明け。

いつもと違う退屈凌ぐ人妖跋扈に、

はあ　これはまた、異変の前触れかしら。

と、半ば程だけ覚悟を決めて新聞を受け…取らずに目を凝らす。

夢と伝統を保守する巫女

博麗神社の霊夢にとっては、”いつもと違う”という事も
いつもと同じ幻想郷の幽玄風情な景色であった。　　い

7話：もこまで届け、エクステンド肝試し

雀の鳴く声がする。

雀の轉る声と。

笹のさざめく風の音。

…朝かな？ 朝の音だな、これは。

すうう…

微かな力で、微かに空気を吸い込んでみる。

口は閉じたままだ。

本当にほんの僅かばかりだけ私の中に入ってくる、竹と土の薄い薄い香り。

半覚醒より、やや覚め気味に寄っている頭の中に、幸せな気持ちと爽快感が広がってくる。

体に疲れは感じない

私の住まいは風を良く通すから、清々しい朝の香りと朝の音を、朝の微風そよかせが運んでくれるんだ。

ああ〜気分が良い

清々しい

雀がかわいい

いつそ窓から入ってくれば良いのに。
入ってきてても良いのに。

昨日は、凄いご飯食ったからなあ。

ド力食いたなあ〜

慧音が凄かったなあ〜

「……………」

妹紅は、寝返りながら昨夜の事を思い返してみる。

朝の爽快感に身を委ねながら、まだ閉じたままの瞳もそのままに、
薄ぼんやりと。

あんなにも激烈に爆発したのも珍しかった。

凄い頭にキタけど、慧音と一緒に遠慮なく啖呵を切って張り叫んで、
鬱憤晴らした！と、2人でガツガツ食べて、不快そうだったアイツ
等の顔を2人で笑って、大笑いして眠ったんだ。

楽しかったなあ

だから、こんなに朝が気持ちいいんだ。

風と香りが、こんなに心地いいんだ。

アイツ等の所じゃ、こごはいくまい。

きつとあの無駄に広い屋敷の奥で、閉め切りの澱んだ朝を迎えてるんだろうよ。輝夜の奴。

慧音とは、どうしたんだっけ？

帰ってっただんだっけ？

泊まってんだっけ？

・・・あ、

学力 勝負

「・・・むう」

変な事を思いだして、つい目を開けてしまった。

見慣れた寝所が、敷き布団越しのちょっぴり床から高めの視点で、ぼやけて見えてくる。

木造の割とちゃんと建築された、私の寝所。

慧音の人脈で、里の大工に、リ…レフォ…

”りほおうむ”して貰ったお気に入りの寝所と寝床だ。

何か敷き布団の区画分だけ、せり上げられた炭燻しの檜ねたい（たぶん檜）の寝台ねたいに愛用の布団を敷く。

床よりも気持ち硬くなくて、寝心地がいい。

まだ、眠い

目を閉じてみて、今度はゆっくり深く息を吸ってみる。

・・・と、

「くああああ〜」

大きな欠伸に変わってしまった。

閉じた目から涙が出てくる。

「ああ あ ああ…」

永くゆつくりした欠伸で、体中に緑の新鮮な空気が満ちてきて、意識にメリハリが効いてくる。

すっかり眠気の醒めた頭で、竹林の朝の気持ち善よすぎる声と香りに体をうたれながら、思う事がある。

これは…もう。

この気持ちよさはもう。

寝てても良いヨって事なんじゃないかと。

あ…キタ…

すうーって

眠気が…

・ねれ・る・

ク
う
ウ
.

・
・
・
・

まず、地面が40センチくらい。

地表の移動距離感でそれ位の長さは移動した。

クンツッ！といった感じに急激な速度で斜め上方向に。

方向と速度もあつて、妹紅の体だけ地表に置いてけぼりをくらい、元々居た空間軸から移動する事は無かった。

ただ 寝ている身で横になっている正中線までは干渉を免れ得ず、クリンツッ！と距離分回転し、うつ伏せの体勢に顔面が布団へと突っ伏す事になる。

ぼふんツッ「ヴツ……」

持ち上げた布団の頭側足側の両端を、一気に真ん中に折り纏めた瞬間に、正面の寝台に背中が向くまで腰を回し、後追いで腰から上体の肩に流れる回転力を…… 布団の巻き上げ抜きに完全利用する。

「起きろ！妹紅おお！！」

跳ね上がる敷き布団。

舞い上がる妹紅。

豪快に背負い抜いた布団が、回る背中の後を追い、巻き引かれる。瞬間的な一場面は、小説描写の様に緩やかに微動に展開し、布団と2人のしなやかで美しい流動美に心奪われそうになる。

巻き上げた布団が、慧音の回りシナる背中の中のラインの周囲をマントの如くヒルガエ翻りながら縦回転に疾駆する。

腰の入った半回転の慧音の躰が、瞬間、瞬間の須臾しゅゑんなる間隔に背負い投げる勢いのまま、もう半回転して戻ってくる。

縦回転に回っていた慧音の視界に、妹紅の舞い回るスリムで白く綺麗な足が映りだす。

普段着では、長い裾と袖に隠される手足が、今は寝間着から、ふくらはぎや肘程までスラリとしなやかな素肌を露出させている。

リボンも解かれて、風に舞い幻想的に広がり流れる眩惑の雪色羽衣（慧音ビジョン）な妹紅の長い髪が、格好良く舞い二回三回と流れ過ぎる腕と脚を絡ませながら、より美しく…映え…る　妹紅・・の

ギョルルルル！！

回る回る妹紅が回る

非トリップなビジョンにてギョルンツギョルンツ激しく舞い回る妹紅。

キリキリ舞う妹紅。

から、

ヒュボツッ！

単発の真っ白い弾幕が、マグナム銃撃が如き恐ろしい威力と速力で、撃ち出された。

弾幕より速く！

弾幕より痛い！

妹紅の躰が無意識に撃ち放つ”蹴り”が、慧音の顔面をズドンッ

慧音の世界に、須臾より僅かばかりだけ永めの走馬灯を魅せて…

派手にベッド（寝台）から落下する。

ガッダーーンッ

「痛^{いだ}ああッ」

本当に痛そうな音と叫び声を発し、震える手で寝台の縁^{へじ}を掴んで、妹紅が顔を覗かせる。

「ひ…非道い子だ…」

「慧音は、非道い女の子だッ」

妹紅の剣幕にもロクに受け答えもせず、慧音は血色悪そうな蒼白の表情で、腰に両手を当て仁王立ちしていた。

「寝ている場合じゃナイんだよおお妹紅お」

そして、清々しい朝に似つかわしくない、重低音トスの絡めた言葉を妹紅に与える。

「!!!!!!」

「な 非道い事されて怒ってんの私なのに 何でそんな、おっかない顔してんだよおお」

ビクンツと、硬直して慧音の言動に抗議の句を挙げると、寝台の縁から覗かせる顔を引っ込め、また隠れてしまった。

「.....」

「あ」

「いや、違っんだ妹紅」

無人の寝台から

「.....」

「返事がない。ただの屍のようだ」

「だから！遊んでる場合じゃ、ないっんだよ妹紅」

ズンツズンツと寝台に踏み込み、隠れる妹紅を引っ張り出すと、されるが儘に寝台上へ戻される妹紅に

一枚の紙切れを翳す

「この紙切れの所為で、昨夜の事が大変な騒ぎになってる筈なんだ」

「……騒ぎ？」

「何だ コレって鴉の新聞じゃないか」

慧音から鴉天狗の新聞：文々。（ぶんぶんまる）新聞を受け取り、まだ少し慣れない（恐い）表情をしている慧音の機嫌を伺う様に、視界の端に慧音を入れながら新聞を読んでみる。

「慧音：鼻血が…」

「これはね、さっき蹴られたからだよ？」

「妹紅からズドンッ」と

「なッ」

「私は慧音と違って、そんな非道い事、絶対慧音にしないぞッ」

「……」

あんな状態からでも、完全な無意識に蹴り撃ってくるのだから、妹紅はデレても侮れない。

慧音は、特殊な訓練を受けています。

よい子のみんなは、危険だから妹紅を無理に起こさないで下さい

ちよつと脱線させて、再び新聞に目を移すと、真っ先に度デカく引き伸ばされた自分達の写真が飛び込んできた。

【第百 季 水無月の二】

永遠亭 対 藤原氏

月夜の学力闘争開戦！？

永遠亭の付近より少し遠目に離れた迷いの竹林の一角にて、永遠亭の住人である蓬莱山輝夜さん（人間「自称」）、八意永琳さん（人間「自称」）、因幡てゐ（妖怪鬼）、そして竹林に住む藤原妹紅さん（人間）、妹紅さんの友人である上白沢慧音さん（ワーハクタク）、最後に何故か八雲藍（式神）という珍しい六組みにて、花見ならぬ竹見の様な「因みに花とかは、咲いていませんでした」催しで集まっていた所、永琳&輝夜×慧音&妹紅に別れた四人組の間に、極めて辛辣な罵り合いを伴う論争が発生した。

ほのぼの雰囲気な竹見会から、威嚇と威圧に満ちた戦場へと一転させた渦中の議題は、

”蓬莱山輝夜と藤原妹紅では、どちらの学力が優れているのか？”

と云う、本来3秒間も要すれば、”どうでもイイ”と云う正解を割り出せる筈の謎掛けであった。

むしろ最初からトンチ問題であったのかも知れない。

その場合、知性的で知られる永琳、慧音の両名が常識的な固定観念に捕らわれ、方向性を狂わせたとも推測される。

過程は様々な推測が成り立つものの、結果的には人間（自称）である洞中の両名を中心に、学力一番勝負の開戦が、竹林中の動植物の穏やかな生態活動に障る（かく云う私も被害者に含む）大波動と大怒号と共に宣戦されるに至った。

写真参照

竹林を揺るがす四組みの人間（半人間含）と、威圧に吞まれ立ち竦む、可哀想な妖獣達の写真

里の寺小屋教師

慧音さんは、開戦の奮起による興奮の為か、顔を真っ赤にして語る。勝負の日取りは、明日からキツカリ5日後だッ
妹紅の凄さで、目にももの見る事になるから、

「 覚悟しろ」

「私は、そんな事言っていないッ」

新聞の端から覗くと、慧音の顔が恥ずかしさで真っ赤になってい
る。

「.....」

なお、宣戦された5日後の学力勝負だが、勝負内容や方法等の詳細が、決定していない。

よって、学力勝負の開戦に立ち会い、宣戦の事実と告知を幻想郷へ広める重役を、文々。新聞が発行者、私 射命丸文が拝命しました権限で、当新聞の配布されます当日の朝。

早朝の頃合いに、幻想郷の人妖様方見届ける中、代表の兩名と各陣のサポーターとなる各立会人達による、“学力勝負子細取り決め会合”が執り行われる事が、決定致しました。

御愛読の皆様も、是非奮って御来訪下さい。

(射命丸 文)

(尚、会合会場は今更特筆する必要性も無いでしょうけど、勿論

「何で、神社なのよッ」

境内中に響く巫女の叫び声と同時に、魔理沙から新聞が引つたくられ、ビリビりに破かれる。

ビリビリッ　バリバリッ

「まあ…そんな訳で、私達も奮って来たわけだ」

ずっと霊夢への新聞翳し見せ続けで、疲労に震える腕を^{いたわ}労る様にさすりながら、魔理沙が返答する。

「神社を揉め事舞台のメツカみたいに書いてえ〜あ〜の〜カ〜ラ〜ス〜う〜う〜う」

ぎゅぎゅ〜と破いた紙切れを握り締め、怒りを露わにする、揉め事舞台の博麗巫女。

「まあ、そう怒るな霊夢。既に始まった揉め事なら、行き場に迷って面倒な所で爆発するより、いつそ神社に来た方が困らないぜ？」

「まあ、それはそう…」

「私かな」

「うわツと!!!　じよ　冗談だよ霊夢ツ」

「そーだツ　アリスも連れて来る事にしたぜツ」

もどってくるなーとか後ろから聞こえたが、こんな面白い事見逃す手はない。

あー言ってるけど、霊夢の事だ。
私が、アリス連れて戻る頃には、揉め事も立派な勝負事として統括
されているはずだぜ

後はまあ、

揉め事起こした当の本人達が、揉め事にされている現状に、いつ気
付くか

だな。

魔理沙がアリスの家に箒を立てかけるのは、妹紅が舞い上がる2
時間前の事である。

8話：おてんばゲモンジサーガ　くそして妹紅へ

誰が、どう、つつこもくと、断固、季節は梅雨入り前。少し前。

朝日が上り、まだ間もない早朝の頃

人里の中では、ちょっとした騒ぎとなっていた。

あの号外新聞が人里中にまで配り回られ、本来なら幻想郷の妖怪達や妖怪に対抗し得る能力のある人間達の範囲内でのみ、騒ぎ立上げられる様な事が、人里の皆の興味まで惹き付けてしまっていたのだ。

いや・・・

興味をひいたなんて物ではない。

寺小屋に薬屋さん。

両雄並び立たず。

人里の生活に最近馴染み深くなっている両名なだけに、子供達にまでしっかり伝わっている、その大仰に書き立てられた記事によっ

て、

家屋毎の、そして御近所同士毎の間で、世代や男女の差により微妙に色合い異なる興奮や期待、喝采や 何故か尊敬の声すら上がり出し、外の世界の時間感覚で大体朝の7時半位の頃合いにもなると、『我らが里の 慧 音 先 生 ! を皆で勝利に導くゾツ!!!!!!』と。

まさに、里と慧音先生の決起連盟団だ!と。

主に、花の髪飾りを付けた振袖着物の小柄な少女を中心に、慧音先生を激励する声は人里中へ広がり集まり、連帯感を高めていた。

ただ、

稗田家の美人薄命ひえだな私：少女は知らなかった。

まあ つまらないと言われている授業とは裏腹に、慧音先生がどれ程の人気を性別問わず 特に大人達を対象に獲得していたのかを。

その人気たるや、何と射命丸 文の文花帖を元にプロマイド写真まで出回っている事など、少女はおるか、当人すら知らない現状であるう。

固めな慧音先生の表情が和らいだ（フレーム外には大抵妹紅）一瞬を捉えた、盗撮同然な一枚などが男性の間では特に大人気らしく、里に来る妖怪の情報提供などと引き換えに天狗から貰ったりしてい

るようだった。

そして満月の冷光で、凜とした佇まいを闇夜に輝かせている“ハクタクけーね先生”に至っては男性は勿論の事、女性の圧倒的支持を得る激レアカードと化していたのである。

あくまで水面下での隠れ娯楽として、出来るだけ当人に悟られぬよう、密やかに浸透し、また決して文々。新聞に載らないあたり、射命丸文の狡猾さが伺える。

奇しくも今日は寺小屋の休日。

慧音先生にとつて、昨夜は週末といった所であった。

普段朝の早い慧音先生も、今日ばかりは授業だ歴史の編纂ヘンサンだと、いきり立つのも“一回休み”とし、朝からぬくぬく過ごす積もりでいたのだが

慧音先生の預かり知らぬ所では、

所ではって言うか、まさにココでは、今すぐにも慧音先生を筆頭に、我ら上白沢連盟団一同、博麗神社へ大挙して出陣せんと、慧音先生の所へ集結する準備が整いつつある所でした。

そして、

神社と言えば祈願！

祈願と言えばお賽銭！
そして信仰！

人里中から必勝祈願！

博麗の巫女にとっては、まさに夢の様な柵ボタ展開が、刻一刻と近付いていた。

慧音先生やハクタクけーね先生の新聞記事　いや、むしろ写真を手に手に高ぶっていく人里中の士気は、もう誰にも止められないのか？

そんな里の人間達を、これまた真剣な顔付きで眺めている少女がいる。

一度見た事を忘れない程度の能力、求聞持くもんじという能力を持つ、緑がかった山吹色な振袖が目を引く和服姿の小柄な少女。

人里の名家、稗田家の当主。九代目阿礼乙女。アレオトメ

稗田阿求ひえだのあきゆは、前世である初代から八代目までの自分自身から引き継いできた、著作書“幻想郷縁起”に関する記憶と照らし合わせてみても、やはり間違いの無い確固たる自信を以て、一人頷き、呟くのであった。

「うん」

「……」

「焚きつけ過ぎた」

【阿求の独白・了】

小規模ながら、離れに寺小屋を設けている程度の能力を持つ人里の土地。

上白沢 慧音の住まい。

今日は朝からぬくぬく過ぎす。

それは、

慧音先生にとって、竹林の古式家屋で二度寝三度寝する事ではなく、見ると眠くなる箱の望める縁側で、何度も昼寝したり間食して過ぎす事でもなく。

ましてや・・・

川岸や赤い門前で暇の潰し方を模索しながら、ぼあくとしていた内に昼寝に入ったりする様な事でもなかった。

「ふんふんふん」

「ふふふん ふん」

誰も生徒の居ない静かな寺小屋に、

「ふふふふーん ふーん ふーん ふーん ふん」

鼻歌混じりで上機嫌に教卓の上を乾拭きする慧音先生の奏でる、

「ふん ふふふん ふーん ふん」

他人のテーマ曲が響き渡っている。

「ふふふふ」

「ふふふふ」

自分のテーマ曲で、息が上がり諦めた慧音先生は、生徒達の文机側から黒板側へと回り込み、教卓の脚を拭く為にしゃがみ込むと・

「ふふふふ」

「ふ〜うん」

教卓の中で、八雲紫が横に体育座って寝て居た。

「ぐうう〜 zzzz…」

スカッ

雑巾と手が、教卓の脚を内側へグレイズし頭を強打する。

ゴチンツッ！

「ふぐっ」

「ふあ？ うう〜ん 五月蠅いわあ？」

「蓬莱人間の子守唄に『ドカンガツシャーン』なんて、効果音があったかしらあ？」

教卓が勢いよくぶっ飛び、文机に激突する音で、不機嫌気味な目覚めを迎えたのは、

『気味の悪い微笑み』

『境界の妖怪』

そして、

『“神隠しの主犯”』

「八雲 紫い〜い〜」

「い（痛）っ つつ こんな所で 何を」

「何を？ って、」

稗田阿求の記した第九版、幻想郷縁起『妖怪図鑑』の5割増には危険視せざるを得ない妖怪が、お馴染みの閉じた扇子を頬のラインあたりに持つて行き、バツと、一杯に開いて口許を覆い隠してしまう。

その、下向きの弓の様に薄く締まった微笑の口許が隠れ切る寸前で、扇子の端まで届かんとする勢いに気味悪く開いた様に見えるのは気のせいか。
見せる様に隠したのか。

「か・み」

「か・く・しい」

「なんだとツ！！！！」

「そんな事」

「そんな うう」

神 隠しだとツ？

この妖怪の口から、決して聞かされなくなかった宣告を。

人里の中で 妖怪から人間を守護する者の本陣のド真ん中まで
潜入されて 実質、力遠く及ばない相手に眼前に体育座られて。

「どうしたの？」

「あんなに楽しそうにしていた掃除は、もう終えられたのかしら？」

「 や 」

「 なあゝに？ 」

今私は、何を口走ろうとしたんだッ
止めてくれ？

どうにも出来ないとしても決めてかかって、懇願しようとしても言うの
かッ

こんな、どうしようもない能力の妖怪だからって、諦めたら さ

里の 人間は

私が守らなければ

ま 守らなば 守なば バクバクしてきた

「では、さっそくね 」

八雲紫が扇子をそのままに、体育座りな姿勢も少し両足を伸ばし
たくらいのままに、後方へと浮き上がる。

「はッ はう！！」

「はうわバふわッ」

緊張と緊迫感の余り、頭のぐるぐるになったワーハクタク！ ス
キマ妖怪に猛然と突撃！？

「止め…やめてよおおお」

「!?!」

「ぷふあ 可愛いつ! あっ はははは」

「あは…ゴシヤツ!!!」

「ぎゃうッ」

何と慧音先生渾身の頭突きが、図らずも八雲紫の額に大激突した。

慧音先生の頭突きは、本当に痛い。角が生えなくても痛い。設定という謎の不可侵結界に囲われた頭突き。

大妖怪でも何でも、問答無用で『痛い』程度の能力!

「はふうう、」

「はふうう」

ただ、大妖怪は大妖怪でも、相手は八雲紫。

「くおおおお おお」

バタンッ バタンッ

慧音先生自身にも、全く同等の大ダメージが返り、耳を済ましたなら不思議な活気が微かに届いたはずの静寂なる寺小屋に、『妖怪の賢者』と『最も賢い獣人』が、揃って悶え転がっていた。

「ちよっ」

「ちょっと里人一人、神隠そうとしただけで、あんまりに早計な仕打ちですわ？」

「な 何が、ちょっと神隠そうとだ」

「可愛いのは、もうお終いなの？」
「早とちりさん」

「うっ うるさい」

「そんな胡散臭い言葉遣いしてる時が、吉番ろくでもない事する」
「って、れーむが云ってたが、本当だなッ」

「.....」

(霊夢に地を見せ過ぎね)

「だから勘違いですわ」

「人里（ひとこゝろ）で神隠すのではなくて、ここに神隠すのよ？」

トン…と、紫がいつの間にか閉じていた扇子の先を床に付けると

扇子をスス ス と音も無く真上に移動させ、先端の軌跡から空間が切り開かれていく。

「な… な…」

裂け目が伸びる程に、慧音先生の鼓動が警戒心で高まっていく。

これが、八雲紫。

境界を操る程度の能力が可能にする畏るべき怪異の一つだ。

と、いきなり片足を後ろに跳ね上げ、ハシャいだポーズで、扇子をスパツと切り上げる！

「どこでもスキマ」

薄く微かに開く、両端をリボンで括られた空間の裂け目から、唐突に細い片腕が飛び出した。

「!!!?」

「なツ　なにが」

にゅん　と這い出た腕が八雲紫に掴まれたかと思うと、一気に寺小屋へ引き出された私が、慧音先生の真ん前に出現し、両腕を開き気味に新聞持つ手もそのままに万歳する様子上げ。

格好の良い、決めのポーズを取ってみせた。

「はいっ!?!」

「あ… あっ!!!?!?!?!」

「阿求うううッ」

神出鬼没な妖怪は、いつの間にか姿を消している。

「え　お前」

「何を　何を　」

状況に頭が追い付いてこれない慧音先生。

「ほら、私って虚弱属性じゃないですか」

「幻想郷じゃ、物書きとインドア虚弱は、基本同誌にオフセット印刷じゃないですか」

「で、慧音先生にお知らせしたい事がありました　ちょっと、」

「神隠されてみました」

万歳決めポーズなままの阿求。

「・・・」

「なんて無茶な」

「所で、神社の会合は、もう終えられたのですか？」

やはり私の目算通り、どデカい『？』が頭上に立った様な表情を返してくれる慧音先生。

「本当に単純な話、この天狗の新聞を読んで頂けると、一発ですか」

慧音先生は、天狗と言う単語を聞いた瞬間、眉間にシワを作り、一拍置いて、ひゅ…と息を呑んだ。

「はい、慧音先生」

私の差し出した『文々。新聞』を、触れたくもない物に近付く様な真っ青な表情で受け取り、恐る恐る視線を紙面に向けている。

恐らく真っ先に、感情剥き出しに赤裸々な表情の数々を晒している写真が、目に飛び込んでいる事でしょう。

まあ、何て言ったらいいんでしょうか？

幻想郷縁起にも記しましたが、満月の慧音先生は気が立っていると言いますか、色々とその時々状況に準じてアレな感じになり易いんですよね。

それがまた、普段の冷静な慧音先生の間接だと、耐え難い痴態以外の何物でもないでしょう。

変身していた夜の事を聞かれるのを、慧音先生は極端に嫌がります。

「昨夜、仕事で遅くまで起きていらした職人さんに聞いたのですが、里中の家畜が狂った様に騒ぎ出したそうですよ」

「…って普通は、なるじゃないですか？」

「人里中の野良も家畜も夜泣きの赤ちゃんも一斉に黙りましたから

ね？ この時

「これは違う」

「違うんだ」

「妹紅の凄さで、目にもの見る事になるから」

「覚悟しろー！！」

「ねえ？」

「慧音先生。ねえ？」

「私は、そんな事言っていないッッ」

里の人達、特に子供達の前では決して晒さない様な紅潮した表情の慧音先生。

「あの気狂い天狗」

「よくも」

「よくも、こんな事を」

「こんな事をおお」

憤慨する口調とは裏腹に、今度は真っ青になっています。
新聞が、カサカサ鳴り出している。

「あのお」

「慧音先生？」

「お知らせしたい事が」

「まだ」

「何かあると言っのか」

「その前に確認させて下さい」

「慧音先生は、この件をこれから、どうするお積もりですか？」

「・・・」

はたと、一瞬で目を覚ました様に真顔に戻る慧音先生。

勢い任せではなく、極めて真剣に思案しながら応えてくれました。

とても、静かに。

「阿求」

「私はこんな記事に踊らされて、無用に騒動を助長させている程、暇人ではないよ」

そう言つと、散乱した文机や教卓を元に戻しながら、言葉を続けます。

「確かにこの記事は、正確ではないが、大まかには昨夜の事実を伝えてる。残念な事に」

「わ 私はハクタクに変身した勢いで、妹紅や永遠亭の連中と共に、里や竹林の夜の安息を妨げていたのかも知れない」

最後に教卓を戻して、少々無理矢理気味に、強気を装った様な表情と仕草で、私に向き直った。

「しかし！」

「それは、満月に酔い興じた一夜限りの寸劇」

「そして満月の夜は、もう終わっている」

「幕は既に降りて、朝日はこんなにも上りきっているではないか」

まるで、歴史の教鞭を執る時の様な、威厳を感じさせる落ち着いた語り口で、教卓越しの私に語りかける・・・

「なあ？ 阿求」

「いつだって、私達里の人間は今日を生きるので精一杯じゃないか」

「・・・」

「こんな紙切れ如きで、茶番紛いの寸劇を終幕後まで未練がましく引きずっていられる程の暇人は、悪魔か亡霊、妖怪かぶれな白黒魔女だ」

「・・・」

「厄介な人妖達の暇を埋める予先を、こんな紙切れ如きで、人里から逸らせてくれるなら、私は喜んで俗人妖共の、ひとときの嘲笑に

「甘んじるよ」

「そして、里は今日も平安で忙しい一生懸命な生活に従事するのさ」
「妹紅もきつと分かってくれる」

「慧音先生・・・」

「阿求も安心してくれていいよ」
「私はこんな駄紙如きで里の人間を巻き込み兼ねない様な行動をとったりはしないさ」

「慧音先生！」
「わたし 私、感動しました！」
「やはり慧音先生は、とても頼りになる立派な方でした」

「分かってくれたか」
「阿求！！」

・・・が、

ここで視点は切り替わって、一見には堂に入った賢人ぶりに弁論を放つ慧音の内心は、バツクバクに高鳴っていた。

よし！ よっし！？
なんか上手い事言えた。

何とか体よく無視する方向へと切り抜けたぞ！

俗な人妖共のひとつきの嘲笑だと？

あいつらが、そんな程度で満足するタマなら、どんなに助かるか。

麓の神社など輪をかけて暇人妖怪共の巣窟と化しているに違いない！

そんな中に、のこのこ身を晒しに行くなど、愚の骨頂ではないか。

妹紅など、尚更鼻にも掛けないだろう。

とつくに駄紙を焼き払って寝直しているかも知れない。

ついでに烏ごと駄紙の残機を、焼きびちゅらせていてくれないかな？

「慧音先生なら、きっと治める事が出来ます！」

「慧音先生なら、負けません！」

一度見たものを忘れない、求聞持の能力。

阿求は先述の独白を一字一句間違ひ無く、表情の引き攣りゆく慧音に話し伝え

里の通りに面した寺小屋の窓を手早く全解放した。

／＼ワツツ／／

と、その瞬間から吹き飛ばされそうな喝采の突風が、気を失ってしまいたい思いの慧音の顔面を叩く。

里の人々皆一様に、手製の応援旗やら襷タスキを掛けて、我らが里の慧音先生！を迎え入れる布陣が出来上がっていた。

「……！！……！！……！！」

錆び付いたブリキ人形みたいな首回しで、阿求を見る慧音。

稗田阿求は、いつの間にか、白地に藍色で縁取られ『上白沢連盟団』と縫い飾られた襷をかけていた。

「ごめん。慧音先生」

「收拾が、つかなくなっていました」

上白沢慧音は、退路を絶たれた。

「何してくれてんだああああ ああッ ……！！！」

ああ・・・

慧音先生が飛んでいく。

連盟団と暇人妖怪達との力チ合う危機を、

今の神社へ行く事の子供達への危険性を、大人達へ説明する事。

子供達とは勝利の約束をする事で、何とか回避した慧音先生は・・・

「妹紅おお おお ーーーーっ！!?」

そう、張り叫びながら迷いの竹林方面へと、キリモミ回転しながら矢の様に飛んで行きました。

では、これで・・・

私はもう、頭突きのダメージが限界ですので、あっちの方に逝っ

暑すぎず寒すぎず。

梅雨入り前な、水無月初旬の幻想郷。

迷いの竹林。何処かしらに佇む藤原妹紅ふじわらのまひるの住処ほど、

幻想郷に於いて物静けさというものが似合う場所は無いだろう。

物静けさ。

それは、正常に流れる時と確かな生命の最中であってこそ。

物静かな場所と言えるのではないだろうか。

永遠亭は。永遠の魔法で時の変化から拒絶されている場所であった。

ナマ物が腐り出す事もないし、風は流れず

葉は揺れず、落ちる器物も形を変えず。

覆水だつて盆に返る。

そして月のお姫様により永遠が解かれて以降、

その永遠亭は出来るだけ騒がしくあろうとしているのではないか。

時間と生命のもつ騒がしさを良く知る高位なお宇佐さん。

因幡てゐは少なくとも永遠亭を物静かななどは、もう思わない。

白玉楼は。現世で言う所の『時間』という概念の無い場所。

無いものが流れたり止まったりはしないもの。

いくら庭の桜が狂い咲き、舞い落ち、静寂と幽玄の内に佇もうとも。

白玉楼はやはり、死霊の為にのみ在るべき無音の常世。

こんな場所に無明な生き物など踏み込んでくるべきではない。私の半分があれば、もう充分ではないか。

とどのつまり

有無を言わず主人と紫に置いてけぼりを命じられた白玉楼の半人半霊な庭師さんは、

一人庭掃き掃除をしながら、しみじみ思う。

とどのつまり、平和が一番なのではないかと。

博麗神社の境内は。

巫女さんが洩れなく嫌みと見做すだろう。

少なくとも一人、普通の黒白い人間が退治されている。

時の流れも、動植物達の必要最低限で聴き心地の良い営みの声も。

この場所ばかりは、妖精や妖怪に乱される事も無く、本当に静かで。

そして微かな自然の音が絶えず流れる。

広大な荘厳さとも幽玄さとも無縁な『竹林の慎ましい隠れ家』。

私は。藤原妹紅が片膝座りにひっそりと眠る隠れ家を、少しだけ慧音にいじらせた。

届く陽光と通る風。

拓かれた竹林には、純真な生き物が惹かれ寄る。そんな朝をローライフペースに目覚めて欲しい。

藤原妹紅の隠れ家は幻想郷に於いて、
とても物静かな場所なのではないかと。
私は、そう感じてならないのです。

DEEP三昧。『東方もこけね勉強抄に見る、私の想い耽り』

竹林のそよ風が笹の葉の揺れる音を鳴らし、
木枠の窓から屋内へと吹き込んでくる。

笹の葉の聴き心地良い音色と共に、そよ風が耳元の髪を掻き撫で
る感触を残す。

そして熱くなっていた顔の熱を少しずつ冷ましながら、
そよ風は後ろの方へと流れていく。

サラサラサラ・・・

ああ。なんて心地の良い風が吹き込むのだろう。

不意に。外で一際大きく竹を揺らした風が、
高音と低音の入り混じった音をビュオオツ！と上げて吹き込み。
寝間着姿の妹紅の背中から新聞を攫い、舞い上げた。

「あ」と小さく上がる妹紅の声。そして、

妹紅を舞い上げた時にも落ちなかった私の帽子も落下させた。

カラン。

どれほどの時間、私は回想に耽っていたのであろうか。

お陰で、だいぶ気の高ぶりは落ち着いてきたのだが。

すっかり飛び続けていた私の意識には、

足元で鳴り響いた音が余りにも刺激的で突然すぎた。

「ひいっ！」

掠れた低い悲鳴を上げて、体をビクンツと硬直させてしまった。

しかも 右手などは既に落下済みな物を押さえつけようと、

気付けば何も乗せていない頭を必死にペタペタやっていた。

妹紅に呆れた目で見られている。

「慧音え」

「なんて声上げてんだ」

妹紅は胡座で座っていた寝台ねだいから床に足を下ろす。

肘や膝を覆った所で終わる袖や裾口の辺りを

薄朱い紐で軽く結わえられた寝間着からスラリと、白いふくらはぎと足首、素足が伸びて床にペタリとしっかり着いて腰が浮く。

その、やや中腰な姿勢のままに私の足元へとトツと駆け寄って、

落下物を拾ってくれた。

「ほら。落下物、ここ。ここ」「そう言っただの頭の上の右手の上に、帽子をコツンと載せられてしまう。」

「あ ああ」

「すまない、妹紅」

中々焦りの拭えないまま、私は何とか取り繕おうと努めている。

焦りだ。

そうだ。焦りなのだ。

気が高ぶっているのではない。

私は焦っている。

何に對してだろうか？

阿求が突然現れた時も記事や写真を見せられた時も、寺小屋に里中の人が集結していた時も、今ほどの焦りに囚われていたであろうか。

いつの間にか、拭えない焦燥感が私の身に染み付き離れない。

「ね」

この感じは。

そうだ。八雲紫が現れた時にも

神隠しを行うと宣告された時にも同じ状態になっていたと思う。

「おい、慧音」

段々と治まってきていた筈の焦燥感が、
妹紅の家に向かっていている合間にはまた、私を焦りで狂わせている。

いったい何が、こんなにも私を焦らせて止まなくさせているのだ。

「慧音やつ!!」

妹紅の叫び声が、耳元で爆発した!

「わあっ」次いで、方耳の中で軽い痛みとキーンと言う高音以外
聞こえなくなる。

少しずつ回復してくる聴覚と共に、
視界の中で妹紅の慄然とした表情も、はっきりと像を結んでくる。

その表情を今度は心配する様な表情へと変えていく妹紅。

「さっきから、調子悪いのか?」

「様子が変だ。慧音」

そうだ。自分で言うのも何だが、どうも私の様子がおかしい。
もっとしっかりしなければならぬ。

いつまでも油売りな真似をしている場合ではない筈だ。

「すまない妹紅」

「少しばかり取り乱してしまったようだ」

平静を取り戻す様に努めなければ。

私にも妹紅にも、やらなければならぬ事があるのだから。

「まったく慧音の乱心振りにも困ったものだ」

「朝っぱらから、あんな起こされ方をされる覚えはないぞ？」

私と違って、すっかり調子を取り戻している妹紅が、ぐぐつと顔を寄せて詰め寄ってくる。

まあ、確かに勢い任せにやりすぎではあったかも知れないけど、

「まだ朝方ではあるだろうが、もうそろそろ昼前だぞ。妹紅」

正直、まだ寝ているとは思っていなかった。

そんな妹紅に突発的に喝の一つも入れたくなかった気持ちだが、あんな行動となって出てしまったのだと思う。

「むむう」

「昨夜、あんなにガツツリ食べたんだから仕方ないじゃないか」

妹紅は押し負けた様に寝台の方へと後ずさって行く。

そつと寝台に腰を降ろすと、急に恥ずかしそうに顔を俯かせて。そして、ぼそつと言い難そうに呟いた。

「そ　それに、」

「慧音から貰った、このせり上がった寝床が　な　」

少し間を開けて。

「　少しだけ寝心地良いんだ。　いや」

「　　凄く」と、更に小さい声で、すぐに言い直してしまう妹紅。

そ　そんな事言われると、嬉しいじゃないか。

余計切り出し辛くなってしまうんじゃないか。

私は衝動を抑える。

妹紅の横にスと座って寄り添っていたい衝動を抑えて

「あいな、妹紅」

「その 新聞の 事なんだが」

ジワッ

何かが胸の奥で重くなった気がした。

あれ？続かない。

言葉が続かない。

最初の意気のままなら、ガツと手を取って連れ出す積もりでいたのに。

妹紅も先を促すこともなく、俯いたまま沈黙を続けている。

妹紅は聞いてくれているのだろうか？

無言で俯くその表情は分からないが、耳が赤くなっている。

私の顔も何だかまた熱をもってきた気がした。

もしかしたら、少し赤くもなっているのかも知れないが多分、

私達の間では違う空気が流れているのではないだろうか。

こう、少しでも時間を置いていると、

少なからず落ち着きを取り戻せてくる気がした。

「新聞？」

ようやく妹紅が俯いたまま一言。

すると途端に。

耳の赤くしたままの顔をぱっと上げた。

「そ そうだ新聞！」

「お…お… 大事になってしまったな慧音え」

「大変だ。どうしよう」

寢台に座って足をばたばた遊ばせる様に動かす妹紅は、ちっとも大変に感じている様には見えない。

「そうなんだ妹紅」

「その新聞が今や幻想郷中の知るところとなっている事だろう」

ああ

本当にそうなんだろう。

なんと気の重い事か。

「うーん」

「でもまあ、今回も何とかなるんじゃないか？」

妹紅は足を遊ばせるのを止めて、少しだけ腰を浮かせると、本当に気持ち分だけのほんの少し、座り位置を横にずらした。そして、少し開けた寢台の縁をぼんと手で軽く叩く。

妹紅の正面でいつまでも立っている事が

見下ろす様で何となく気になっていた私も、

誘われる様に自然な気持ちで妹紅の傍らに座ることが出来た。

「私はどうせ、あまり竹林を抜けたりしないし」

「業を煮やした天狗が、嗾けケシカにきたら」

妹紅の口許が弓の様に細く広がり、
何とも人の悪そうな笑みを私に向けてきた。

「また焼き鳥食べたいとか言つて、追つ払つてやればいいんだ」
「あの時みたいだね」

あの時

妹紅の言っているのは、竹林で火事を起こした時の事だろう。

そう凄く昔の事と言つわけでもないが、1年強程も前の事だ。
迷いの竹林の奥深く。

永遠亭ともさほど離れていない辺りの竹林一帯が焼失した。

幸いにも野生動物達の住処とも程遠く、

事前に危険を察知した野鳥や野兎達にも目立つた被害はなかった。

とは、永遠亭に住む妖怪兎達の長、因幡てゐの見解であるが。

『蟲達の存在をお忘れなく!!』とその省られた被害認識に

鎮火直後の現場にて大いに抗議していたのが、蟲を操る蛍の妖怪。

闇に蠢く光の蟲こと、リグル・ナイトバグであった。

私を含め消火活動に当たった銘々、鬱陶しい蟲つ娘からすいすいと
視線をそらすよう努めていた時の事。

そう。あの、蟲より鬱陶しい鴉天狗がやってきたのだった。

唯でさえ穩便に。いや何も起こらなかつたと言う方向で双方
合点していた所であつただけに、私は内心気が気ではなかつた。

その場は何とか、妹紅と永遠亭の姫が上手く取り繕い（脅し）、
退散した鴉が有る事無い事書き立てやしないかという心配もあつた

が。

火事騒ぎを記事とした新聞は一切撒かれることは無かった。

そうして幾月も経過し、私も妹紅も鴉への危惧など忘れ去っていた頃。

あの号外と称したオールド・ゴシップの数々が所々で配られたのだ。

その中に　とうに解決の形で片が着いていた竹林火事を大々的に蒸し返す様な一面記事が含まれていたのであった。

しかもだ。

配布後の鴉天狗は火元の真相を究明しようと、私の知らない内に妹紅の所へ根掘り葉掘りついに来ていたと言っではないか。

その肝心の火元の方とは言うとなんにも愉快そうな調子で。

『目一杯脅しをかけて、指先の炎をぐるぐる回してみせたら』

『あの鴉血相変えて　どうしたの慧音？そんな目ん玉まん丸くして』

なんて言っていた妹紅に　私がこの時どんな気持ちでいたのか、どのくらい伝わっていたのだろうか？

あの鴉天狗の新聞。

『文々。新聞』は、当人曰わく基本的には妖怪向けに発行されている。

だが、何かの拍子に人里へも流れ、広まってしまう事がある。

つまり今回の様に。

そして、この時の号外新聞もやはり。
その一部が里の人達の目に触れてしまっていた。
その殆どが妖怪の他愛もない諸事である為、
この時は別段騒ぎになる事も無かったのだが。

この妹紅の記事に於いてだけは、ある影響を人里にもたらしていた。
た。

得体の知れない事象に対する無意識の恐怖感、疑念の様な畏れ。

言い知れぬ不安感是人から人へ伝染して広がり
人里の誰もが何処かピリピリした雰囲気を感じて
た。

人里にとって。

人里の人間の生活にとって、そういう事なのだ。

『 火 事 』

とは、
大切な家財を。
大切な生活を。
そして大切な人を。

焼いて奪い尽くす『畏ろしい大災害』なのだ。

誰にもどうにも出来ず、ただ燃え尽き。

奪われて『尽きる』のを待つだけ。

自然発火なのか放火なのか不明確な『怪火』が、次は自分達の身にも降りかかるのではないだろうか。

もちろん、妖怪や魔法使いの跋扈する幻想郷。

炎を扱える妖怪も魔法もある事など、人里の人だって認識している。

妹紅に永遠亭まで護衛してもらったり、竹林で妖怪や妖精から助けて貰った人なら、妹紅が炎を纏い扱える事を見知っている人すら居るのかも知れない。

しかし、それが人でも妖怪でも何でも。

『炎を扱える者』と『火事を起こした者』とでは違うのだ。

妹紅だって

ゆっくりにだって、里の人達に受け入れられてきているんだ。時には、子供達に妹紅の事を聞かれる事だってあったんだ。

竹林の火事がどのようにして起こったか、人里の人に知れてしま

う。

私にはそれが耐えられなかった！！

それなのに。妹紅はいつも飄々としていて、
楽観的で。そして

世俗を捨て、この幻想郷で輝夜と再会するまでの永劫を、不老で不死の蓬莱人として独りで生きてきた為か
どこかで無関心だ。

なあ、妹紅。

私がどんなに人里の人達、里の子供達を大切に思っているか。知っているんだろう？

ジワッ

でも、ちゃんと知ってくれているのか？
私には妹紅も人里の人間達も大切に、大好きなんだ。

ジワッ

どっちも私から離れないでくれ。
どっちかなんて嫌だ。

ジワッ

ああ、そうか。

私を堪らなく焦らせ狂わせているもの。
それなのに私は子供達の事を。
それなのに私は妹紅の事を。

ジワッ

「うん。そうだな」

「じゃあ行くか妹紅」

気付いたら俯いていた顔を、もう上げる事が出来ない。

「えー！」

「やっぱり!？」

妹紅が少し距離を開けたのを感じた。

「そんなんで来たんだろうとは思ってたけど さ」

「山だっけ？ 妖怪の」

「面倒臭いなー」

「でも、慧音が鴉を焼きたい気持ちも分かるし」

知らないでくれ。

こんな私を。

「妹紅」

「行くのは博麗神社だ」

「あ、そうか」

「なるほど。確かに」

何か、紙を拾う様な音が聞こえた。

「でも」

「今日神社に近付くのは、やばくないか？」

「妖怪の山で待ち伏せにした方が良くない？」

ああ 駄目

私は妹紅を利用して。

また一層、胸の奥で何かが重くなった。
胸の奥から俯く顔まで、何もかも冷えてくる。
なにこれ。

「行くのは神社」

「.....」

「慧音、まさか」

「行くのは博麗神社だ」

妹紅が驚いた様に大きな物音を立てて、私の真正面へと飛び出した。

「慧音がこんな事に関わりに行くなんて！」
「信じられないっつ」

仕方ないじゃないか。
だって。だって。

危ないんだ。

来てしまっていたら、どうするんだ。

約束なんか していたって
だけど約束だって

したんだ。でも来てしまうかも。
どんなに危ない奴が来ているか

ジワッ

どっちも大切だなんて言っ
て。心配だなんて言っ

て。約束も子供達も信じきれ
ていない私は、妹紅を利用
して。

「昨日があつて」

「今日」

「何もおかしな事じゃないよ」

私は顔を上げて。

妹紅の顔をちゃんと。

「ふ 普通に自然な流れじゃないか？」

「いや！いや！慧音！」

「そう思うなら、ちゃんと私の方見てくれよ」

「どこ見てんの!？」

う う

妹紅 「来て くれなの？」

「えと、それは」

妹紅はとても複雑な表情をしていた。

きつと、行きたくなくて仕方がないって言っている。

「 げない」

「 え？」

「 今年の盆は！もう」

「 塩茹で枝豆も、ずんだ餅も作ってあげないっ」

「 なっ！！！」

藤原妹紅は、退路を絶たれた。

何か。

何か聞こえる。

声が、聞こえる。

ねえ！

妹紅の声が聞こえる。

けーねえ！

誰かを、呼んでる？

「慧音え！」

もこ あれ？

寝台に腰掛ける自分の膝が 凄く濡れてる。

何だ？

ぼやけた頭の中が、ゆっくり、ゆっくり、私の中に戻ってくる。

頬から、熱いくらいの涙が伝い流れていて。

自分の膝も、頬に添えてくれている妹紅の手も濡らし続けていた。

泣いて？

泣いていたのか？

ああ、そうだ。

だって だって、こんなに声だって

「あゝあゝあゝ――――」

私の頬の妹紅の両手を掴んだ手が離せない。
手離せない。

離したくない。

「作るう う」

「作るからあ」

もう、何一つ自分では止められない。
零れ落ちる様に言葉が出てしまっていた。

後戻り出来ない程の騒ぎになってしまった。
麓の神社は、妖怪や知らない妖怪で一杯。

里の子供達と約束したんだ。 約束して、
子供達も神社には行かないと私と約束したんだ。

でも、もしかしたら見に来てしまう？
それが怖い。

もしも大切な人が。
約束をした子供達を信じていないなんて。
大切な友達を利用しようとするなんて。
昨日も今日のも私が悪いのに。

私が楽しみにしていた事で、妹紅を強請っているなんて。

「えっっっ」
「うっっ」 なさい
「ごめんなさい」
「ごめ なさい」

妹紅の声が何も聞こえない

「
静かに聴いてくれているのか。
それとも、私自身の声で聞こえないのか。」

ただ確かなのは。

ずっとずっと、

私の頬を流れる止まらない熱いのと。

ずっとずっと、

私の手の中にいてくれる妹紅の手だけが。

私が泣き止めないでいる間中、ずっと。

私を感じていられた、私の全てだった。

「ふえ ひっく」

「ひっ」

やっと。 少し。

「落ち着いたか？」

「慧音」

「うん」

「少し」

落ち着いてきた。

そっと、妹紅の額が私の額に近付く。

「本当に、慧音は真面目なんだから」
「真面目すぎるんだ」

こっん。

不思議と少し痛かった。「……」
「すまない」

妹紅は「何も謝る事なんかないさ」そう言いながら、転がっていた私の帽子を拾って頭に乗せてくれる。

「さて、」

「準備は出来たかな？」

「慧音先生？」

膝の上に乗せていた手を妹紅にすいとすくい上げられる。

片腕が上へ、先の方へ、軽く伸びて軽い力で引かれていく。

バツが悪くて顔を上げられなかった私も、腕に釣られて寝台から立ち、

驚いた顔を妹紅に向けてしまっていた。

「わわ」

「待ってっ、待ってくれ妹紅」

立ち上がると、もう腕は引かれなくなっていたけど手は繋いだまま。
ま。

泣き崩れてしまった事からまだ完全には回復出来ず、やや涙目のまま

慌てている私の前に。

妹紅のとても優しく　母親が愛しい子供に向ける様な美しい笑顔が
向けられていた。

ああ　普段なら何でもないので。
いま、そんな顔でいられたら　この手を離せなくなってしまう。

「今日の慧音は、」

「今日の私は　」

「な　なに？」

「まだ、調子が変わだ」

ぼっ、と顔が熱くなっていく思いがした。

「だから今日は私が慧音を引っ張って、連れてってやる」

「えっ」「それって。」

「慧音　」

「慧音にも、覚えておいて欲しい事がある」

「・・・」

とても優しいままの妹紅の笑顔に、私は知らず握る手をぎゅっと

強めてしまっ。

「慧音の大切な人達は、私にも大切な人達だ」

「うん」

「護衛中に、生活や慧音の話聞く度に、いつの間にか嬉しくなってきた」

「うん」

「だから、私は人里の人間も慧音も両方大切に思っているよ」
「今度からはさ。遠慮なんかしないで『お願い』しに来てね？」

「う」

間違っ てた。
私が間違ってた。

「おいおい」

「また潤んでるぞ？」

妹紅は手を繋いだまま、急にさっと背中を向けて私を引っ張っていく。

「やっぱり、今日は私が博麗神社に引っ張ってやらなきゃ駄目だな
」
「だから、今度はさ」

私はいつの間にか、妹紅を両方の手で掴んでいた。

「慧音がいつもの調子を取り戻してる時にさ」

「わ」

「私の方をさっ、引っ張って行ってよねっ」

私はぐんぐんと妹紅に引かれ、玄關先に向かってついで行く。

「うん、今日は」

「頼む」

こんな風に妹紅に手を引かれて行くのは、初めてだった。

なのに不思議と。こんな風に手を引かれる感触は、体が覚えてい
る。

それは遠い過去の記憶の様な、奇妙だけど先の未来への予感の様
な。

不安で壊れそうな私を妹紅に引っ張ってもらうような既視感。

不意にそんな事を考えていると、妹紅のペースも少し緩くなって
いた。

大袈裟ではなく、美しく白い雪景色の様な髪が、目の前で揺れる。
足元に届く程まで長いというのに、緩やかなそよ風にも舞い流れ
る。

幻想的な雪色の羽衣が私の前に広がっていた。

リボンを全て解いて降ろしている妹紅の後ろ姿がこんなに綺麗な
ら、

また手を引かれて出かけた。

その時は纏めた髪を解いてもらって、二人で人里を歩きたい。

こんど、遠慮なく『お願い』してみよう。

私は両手で握っていた妹紅の手を改めて強く掴むと、どん！と床を
強く踏み込んで妹紅の手を思い切り引つ張った。

びんつといきなり腕を引かれた妹紅の肩が急停止する。

足先だけが前方の上空へと投げ出されていた。

妹紅は、

「早いいいつ!?!」

繋いでない方の腕を硬直させたまま、

だーん！と音を立てて仰向けに倒れると、

まん丸に大きく見開いた目で私を見ていた。

私は片手だけ離れた手を腰に当てて、

すっかり取り戻せた意気を妹紅に向けていた。

「妹紅!」

「寝間着姿のまま、外に出て行く気か?」

「女の子は身だしなみに気を向けていないと、いけないぞ!」

妹紅は最初驚いた顔をしていたが、

その表情がとて不敵な笑みへと変わっていく。

「やっぱり慧音は、真面目過ぎだな」

「なっ
」

真面目だあー、生真面目女だあー。そんな事はなあーい。

そんな応酬を続けながら、髪が乱れてるだの目が真っ赤だの互いに指摘し合いながら身支度を整えて行く。

もし子供達を見かけても悲観する事はない。

子供達の冒険心と、慧音を応援したい気持ちとが強すぎたんだ。

優しく叱って、もう一度約束すれば大丈夫だ。

それに大切に思う人になら、誰だって過分に心配するものさ。

そんな事を言ってくれた妹紅に、私はただ

「うん」

そう答える事しか出来なかったが。

今の私には、その言葉がとても嬉しかった。

永らく、お待たせしてしまいました。

ただ、その一言しか申せません。
半年以上を空けた、東方もこけね勉学抄の最新第9話です。
如何でしたでしょうか？

久しぶりの東方二次創作でしたが、
今回は有らん限りに私の好みを周到させてしまいました。

なんだこれ？
やや恥ずかしい。

でも、まあ
私はある意味露出狂だからいいか。

参照要項です。

本文中にて語られております、『竹林の火事』について。

これは、ゲーム中やおまけtext等では、語られておりません。

一迅社 様にて出版されております公式ファンブック。

『東方文花帖 Bohemian Archive in Japanese Red.』

にて綴られておりますエピソードより引用させて戴きました。

所謂、書籍版 東方文花帖ってやつです

なのにさ、

なぜですか？ ZUN様。

ダブルスポイラー！。

まだまだ信じて疑わない2合瓶と栞の天狗厨。

DEEP三昧

追記です

この話のちよつとした、おまけ書き。

『EXTRA・text』なる物を活動報告に綴っております。

興味がありましたら、

是非、第9話の更新を報告しました活動報告も併せてご覧下さいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9413g/>

東方もこけね勉学抄

2010年10月11日01時23分発行